

我が言は万人の声 齋藤隆夫

その事件の知らせに、齋藤は込み上げる怒りを抑えることができなかった。

一九三六（昭和十一）年二月二十六日未明、東京で陸軍の青年将校の一部が連隊を率いて、内閣総理大臣、大蔵大臣などの政府要人や有力な政治家を襲い、殺傷するという事件を起こした。世に言う二・二六事件である。

「これはクーデターに等しい。」

武力によつて政治を変えようとするこの事件に、齋藤は怒りと同時に強い危機感をもつた。

大正から昭和の世になるとともに、軍部は中国への進出を計画し始めた。一九三一（昭和六）年に満州事変が、翌一九三二（昭和七）年には犬養毅首相が暗殺される五・一五事件が起きた。軍部の政治への干渉は強まり、反対する者に対する弾圧もしだいに厳しくなってきた矢先に、この事件だ。

陸軍の内部抗争に端を発するこの事件をきっかけに、結果的には軍部、特に陸軍の暴走に拍車がかかった。

軍部は今まで以上に政治に干渉し、または議会を無視した。厳しい弾圧が行われ、反対意見を述べれば生命が危ないという状況だった。政治家も民衆も、日本国内の人々は、軍部に対してだれもが貝のように口をつぐんだ。

そのような状況にあつて、敢然と軍部の過ちを指摘し、誤つた道を正そうと発言する人がいた。当時の衆議院議員、齋藤隆夫である。

齋藤は一八七〇（明治三）年、現在の豊岡市出石町に生まれた。弁護士となつて、アメリカのイエール大学に留学し政治学を学んだ。武器を持った軍が政治の主導権を奪つたらどれほど危険なるか、齋藤は異国の社会構造を目の当たりにした経験から、そのことがよくわかつていた。

この年、一九三六（昭和十一）年五月七日の国会で、齋藤は、
「軍人が政治活動に加わることを許すことになると、ついには武力に訴えて自己の主張を通すことになる。そうなれば、立憲政治が滅びるだけでなく、国が乱れ、軍人の思いのままに事を決めるきつかけとなるので、軍人の政治運動は決して認めてはならない。」

という、事件と軍部の姿勢を批判する演説をした。これは肅軍演説として今も語り継がれている。軍部は政治に関わるべきではないと、正々堂々と意見を述べたわけだが、これは、当時としては相
当な勇気と覚悟がなければできないことだった。新聞でも大きく取り上げられ、多くの国民が共感した。

しかし、この演説の日を境に、齋藤のもとには身辺警護の名目で警察官がはりつき、時には軍人が家に押し掛けてくるようになった。暗殺をほのめかす脅迫状が送られてくることもあった。家族たちは齋藤の身の上に覆いかかる圧力を感じ、不安でならなかった。

一九三七（昭和十二）年七月、日本は中国と本格的な戦争を始めた。翌年には国家総動員法が制定され、国民の生活は戦争のために犠牲を強いられるようになる。

この時も齋藤は力強く「国家総動員法は議会政治を根底から崩すものだ」と反対演説を行った。しかし、すでに日本中が戦勝ムードに包まれ、もはや耳を傾ける同志もわずかしかいなかった。

齋藤は、日本という国の行く末に大きな不安を抱いていた。しかし、彼を取り巻く過酷な環境は、彼の心身を追いつめていった。いよいよ心労のために病に倒れた齋藤は、やむなく政治家としての活動を休むことにした。

その間も戦争は拡大の一途をたどる。電力や米などの物資の供給制限、奉仕活動や軍需産業への動員など、国民の生活は苦しくなるばかりだ。戦地では多くの犠牲者を出している。

病床の齋藤には、人々が苦しむ声なき声が聞えてくるようであった。

「この戦争を、なんとかしなければ……。」

軍国主義一色になりつつある状況で、あの二・二六事件の時のような勇敢な演説を齋藤に期待する人はたくさんいた。

「この状況で、なぜ沈黙しているのか。」

という質問が齋藤の元にくるようになった。

それは、私たちの声を代弁してくれという、齋藤への国民の懇願と違ってよかった。

中国との戦争は終わりのない悪夢のように泥沼化していく。

軍部の力はますます強大になり、厳しい言論統制がしかれた。国民も新聞社も、自由に発言することが許されない世の中になっていった。それらの圧力は国会にまで及び、齋藤のように軍に反対意見を述べそうな人物は、徹底的に監視されていた。

もし軍を批判する演説をするなら、それは命がけになることを、齋藤は承知していた。齋藤は歯がゆかった。一人、考え込む日が続いた。

病状がやや回復した斎藤は、久しぶりに郷里の出石に帰った。そこには、この戦争で生命を落としたおいの墓があった。

墓に手を合わせながら、斎藤は苦しくて戦地に散ったおいの無念を思った。

墓からの帰り道、斎藤は田畑に目をやった。

出石は、秋の収穫期を迎えていた。

田や畑では農家の人が忙しく働いているが、ほとんどが女性が老人ばかりである。働き盛りの男たちは、戦争にかり出されているのだ。

農家で育った斎藤には、農繁期の苦労がよくわかる。

「これは出石だけのことではない。日本全国がこのような状況に追い込まれているのだ。」

黙々と仕事に精を出す残された人たちの姿に、斎藤は胸を絞めつけられる思いがした。

国のためだといって戦地に召集される人も、残された人も、国が何の目的で戦争をしているのか、戦争がどういう状況になっているのか、そしていつまで続くのか、聞きたくても聞けない統制の中で生きていく。

国会議員も軍部に牛耳られた政府を恐れ、だれも戦争問題について質問しようとしなない。

斎藤は一人道にたたずみ、出石の空の向こうを見つめていた。

自宅に戻った斎藤は、ついに動き出した。机に向かった斎藤は、日中戦争処理に関する国会質問の草案を書き始めた。

これが後世に語り継がれる「反軍演説」である。

推こうを重ねた原稿を、斎藤は鎌倉の自宅近くの浜辺に行つて、海に向かつて読んだ。

波の音に負けぬ大きな声で何度も何度も演説の練習をした。妻の手作りのキャラメルのおかげで、声をからすことはなかったという逸話が残っている。

一九四〇（昭和十五年）年二月二日の衆議院本会議。斎藤の演説に期待を込めた人々で傍聴席は超満員である。斎藤は凜然と演壇に立ち、原稿を一切見ることなく、堂々と一時間三十分にわたる演説をした。

「この二年半で国民が払った生命、自由、財産その他一切の犠牲は絶大である。しかもこれらの犠牲はいつまで続くのかだれにもわからない。政府はこの戦争を『世界の平和を確立するための戦い』聖戦』だと唱えているが、過去において正義を掲げた戦争で、実際に平和が得られたことは一度もない。聖戦という名のもとに、国民の犠牲に背を向け、美辞麗句を並べ立てて、戦争を止めるまたとない機会を逃し、この国の将来を誤るようなことがあるれば、現在の政治家は死んでもその罪を滅ぼすことはできない。」

斎藤の演説の後、故郷出石町では、

「先生がやんなすった！」

と喜びに沸いた。多くの国民が、自分の思いを代弁してくれたと感じた。自宅には山ほどの手紙が届いた。感謝や励ましの内容がほとんどだった。

だが「時代」は斎藤隆夫を許さなかった。演説の大半が議事録から削除され、三月七日、衆議院本会議で斎藤の国会議員除名が可決された。除名が決まったその日、斎藤は、

「私の言ったことは、国民すべての声である。」

と、内に秘めていた思いを漢詩にしたためた。

それからの日本は中国との戦いだけでなく、アジア各地へ進出し、太平洋戦争へと突き進んでいく。弾圧の厳しい時代に、国会という場で、国の進むべき正しい道を示した人が先達にいるということ、今を生きる私たちは誇りとすべきだろう。

その声は、「再びあのような過ちを犯さない」という現代の国民の強い決意の礎になっているはずである。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使
用することを禁止します。